

「カルデラ」第二号
昭和五十年六月

小 さ な 粹 長 野 隆

1

透は、伯父にあてがわれた机を幾分もてあました格好で、暫くは鼻唄を漏らしていた。机の上に、一本の煙管があった。彼は顎を支える両手を時折くずしては、細い指先でそれをいじってみた。吸口の歪んだ煙管は、香ばしい匂いを放ち、臭みは口の中に淡い苦味を蒔き放った。磨硝子を透して、あきらかに冷えた夕時の弱光が、メッキの剝げた安物の金にひと筋の影をつけた。透は、それをつまみ上げると慎重に指をひねり、鈍い銀色の影が微妙に変化する様を見守った。口金の歪みが不自然な起伏をつけてよじれると、新たにまた、奇怪な別の影が映し出された。影は透に老人の醜い歯並びを想わせた。それは、言ってみれば、動物の臭気を執拗にもつ、数知れぬ歯傷の痕跡だった。

老人はいつも左手に毛糸の手袋をはめていた。着古されたオーバーコートのポケットの中で、その手は、こうるさく震える死んだ筋肉の運動を止めることがなかった。代りに老人は、赤黒い右の手を自由に使った。

透は、老人の鋭敏な右手が口回りのゴマシオの髭を撫で、おもむろにこのがらくたを取っ

ては乾びた唇に近づける姿を想った。透の手はひるんだ。その隙に煙管は指の間を摺抜け、小指に頸を引掛けると、半ば諦めに近い格好で均衡を保とうとした。それは、何か粘りのある厄介な力に、透には思えた。

2

黒い土が露わになった田の中に、渥美老人は立っていた。彼は半身を積藁にあずけ、時折身を動かすと、ひと束の藁を手でしない、窮屈な背を伸ばしたり円めたりしていた。湿田に穂の落ちた藁くずが散っている。その起伏を滑べって、ずんぐりと動きのない足先から細長くおぼろな影が伸び、すぐ下の畔を横切り、公有池の水面にまで達していた。

透は、畔にかかった影を踏むと、その上を近づいて行つた。老人の姿は、黒く大きな地蔵に似ていた。肩の円みは遠い山の端を促え、傾いた首は背後の夕焼けた光を遮っていた。

透が、老人の顔の中に確かな輪郭を見てとると、彼は微笑んで待っていた。渥美老人は何か呟くと透に手を延ばしてきた。透は、顔で背いた。だが、渥美は手を戻さず——お、お——と小声で笑いかけた。

透が生臭い吐息に向き直つた時、眼の前にかざされた手の下で、荒縄に結わえられた五匹の小鯢が口を空けていた。少年は、戸惑つた顔を隠さなかった。老人は、もう一度息深い小声を漏らすと、笑顔をつくり、黄ばんだ歯を露わに見せた。

渥美老人と透は、一緒に伯父の冢へ向かった。枯草を踏む音と水の濁れかかった小川の流れただけが、僅かに耳の奥で重なり合つた。畔路は老人の不確かな足どりを一層強くさせた。

背後で左右に大きく揺れる人影は、少年を何度か立止まらせた。老人は、その度に——ああ——と呻きに似た声を吐き、例の歪んだ笑いを浮かべているに違いなかった。透は、動けな

くなった自分の足元に、持っていた小鮒を放すことを思い付いた。

枯草の間で横になった五匹の小鮒は、ともに口を寄せ、吐き出された脂が縄にからんで光っていた。

透は、老人が気付くようにそれを置くと、足早に歩き出す自分を感じていた。

3

渥美老人は、顔も上げずに縄を結った。足を半跏に組み、伸ばした方の足の指先から手元に向かって、滑べるように荒縄は出来上がった。縄は、しなやかな曲線を幾重にも束ねていた。強く絞ると、頑固な力が透を押し返した。鬼瓦の頭が影を投げ、すっぽりと老人の軀だけを吞み込んでいた。

渥美は、じっとしていて餅を食うのが惜しい、と言った。この手が藁の中にある芯を掴めば、こうして自然と縛ることが出来る、とも言った。他にも老人は時々わからぬことを呟いた。透は、半ば上の空で聞き、老人の左手を怪訝そうに見た。剥出された左手は、ほとんどまるい拳をつくったままだった。ことのほか鋭敏に仕事を手伝った。それが支える縄の腰も、強く張りのあるものに違いなかった。透は、分からねぬ所で働掛けている力に、戸惑った。握りしめた縄の強さをためす仕草で、何度も力を加えてみた。しかし、粗野な縄目が手からんでくるだけだった。それを見て、渥美は笑った。透は紅くなり、突きはなされた気持で老人を見つめた。彼の齒の間には藁くずがはさまっていた。それは、時折歯で嚙潰すようにして進められる作業の為だ。それはまた、唾がからんで、いつかの小鮒の口に近かった。

渥美老人が下を向いた時、透は、持っていた荒縄を元へ投げて返した。閉じたきり沈黙した渥美の心が、透の心を憎しみの色に変えた。

彼は、歩きながら、手の平に残った繩の感触を捨てきれなかった。そしてふと、本当に渥美だけの密かな仕掛けが、あの繩の中にあるのだろうか、と考えてみた。思えば思うほど、自分の氣持に寒いし、みが残った。

4

その日、透は雨戸を締めたまま起きようとしなかった。朝方に戸を叩いた風は、もう向きを変えていた。だが耳を澄ますと、納屋の瓦に乘し上がる柿の木の葉が四方へ飛び散り、そこいらの地を蹴っては吹き溜る様子が、遠く想われた。薄い記憶の中で、朝方、伯母が襖をあけ、何やら言葉を投げたきり忙しく外出していったことが、昨日の氣分だ。透は、なごんだ。こんな氣持はなんだか久しいことのようにだ、と彼は思った。

透は、ふと、思いがけぬ温みを手に覺えた。外氣の熱らしいそれは、丁度指でまるをつくる大きさの雨戸の節穴から射していた。彼は上半身を起こすと光をたぐり、そこに額を押しつけた。眼は造作なく馴れ、まばたきする度に節穴の景色は動いた。不思議に、額を離すほど景色は脹らみ、反って明るさも増した。窮屈な格好を氣に留めなければ、望遠鏡を扱う時と変らぬ高ぶりがあった。

円い枠の中に見えるのは、改めて見る納屋裏の日溜りだった。葉を殺がれた桑の木と、褐色の雑草を被った農機具と、それに、かろうじて、渥美老人の円い躰が、視界の内に押込められた。透は、不意に高ぶってくる氣分を感じていた。不自然にくねった躰がにわかに固くなり、その内、あつさりと意識を離れていた。

渥美は、この枠の中で、死んだように動かなかった。脇に積んだ繩の山が偶に揺すられるのも、嵐か何かの仕業に思えた。透は、見えない所で進行する手の動きに、少なからず苛立

ち始めた。

——ただ、このままでさえいれば、渥美は永遠に自分を知らずにすむ筈だ、それに、薄く笑うことも出来ずにいる、渥美はあして小じんまりと静か過ぎる心の中に沈んでしまふだろ——。透は、そう考えることで、いつしか渥美を円い小さな梓の中に閉じ込めようとする自分に返っていた。

がらんどろになった気分は、透を脅かした。すると、明るい梓を取り巻く周囲の寒い闇が意識され、透は冷えきった躰を感じずには居れなくなった。同時に、景色は無遠慮な速さで瞬く間に遠のいてしまった。

彼は、戸惑った。そして、不用意に自ら梓の中へ踏み込む気がした。

ああい節穴の残像が消えると、ようやく透は、硝子に面していることを悟った。そこには、色の無い顔がこちらを向いて立っていた。

● 5

外は思ったよりも強い風があった。その為、透は屢々コートの裾を押さえつけなければならなかった。とうに昼を廻った陽射が、周りに鈍くひしめいていた。

彼は、息を殺している自分に気付くと、こわばった足をなじるようにして歩いた。

渥美老人は、気付いてない風だ。躰は前後にゆるく振れてはいたが、手元が見えないため、仮眠しているようにも見えた。

透の足は自らと速く促され、彼は、渥美のすぐ後で見下ろす格好になって立ち止まった。渥美は顔すら上げなかった。彼の足先はかじかみ、組みあげた方のその指先は、喰い入るように縮んでいた。最後の締めを一本の縄に与え、そこを絞ると、老人はようやく透を見た。

透は、口元を歪めて、それに答えた。—— 渥美はまた分らぬことを喋り出すだろう——。透は密かに先廻りをし、適当な微笑を用意した氣になっていた。ところが、期待は無下に裏切られてしまった。渥美はすぐに屈み込み、再び莢を一掴みして、手際よく足の指にからませ始めた。

足先から藁束が幾重かの起伏をつけて振れてくるのを、透は遠くから見ている氣がした。そして、老人の心の外で、小じんまりと突立っている自分を、意識していた。

一本の縄が形になって、渥美の手を離れた。透は、それを素早くつまみ取るなり、丹念に眼をやった。—— この行為は、どこかで渥美の心をためしている——。

渥美が手を休めた時、透は、ポケットの中から、煙管を取り出した。差し出すと、渥美は弱く眼を細らめ、透の顔を見上げた。

そのまま上体をかしげて、老人は、ポケットを探り、別の煙管を出して見せた。

渥美は、また、笑っている。

透には、老人のとった意味がよく分らなかった。彼は、デクのようにその場に縛りつけられた。そのじつ、自然縄目の馴じんでくるのを、不思議に思つて眺めていた。こうして立っていると、勝手に肘が滑り出し、あつけなく老人の心へ踏み込んでしまうだろう——。透の心は、微かに揺れた。

いつの間にか、透は、取り戻した平生さの内に、静かに浸っていた。

剥がれた軒板が、傾いたまま、老人の頭の上で軋んでいた。

透は、その時、ふと、あの小さな枠の中に突立っている自分の姿に、氣が付いた。